



日本国際飢餓対策機構 (Japan International Food for the Hungry: 略して JIFH) は、イエス・キリストの精神に基づいて活動する非営利の民間海外協力団体 (NGO) です。1981 年にひとりの日本人がインドシナ難民救援に参加したことを契機として誕生しました。以来、世界の貧困・飢餓問題の解決のために、自立開発協力、教育支援、緊急援助、人材育成、海外スタッフ派遣、飢餓啓発などに活動を広げてきました。現在は、国際飢餓対策機構連合 (Food for the Hungry International Federation) の一員として、18ヶ国 55 の協力団体とともに、アジア、アフリカ、中南米の開発途上国で、現地パートナーと協力しあって、「ここから始まる飢餓」に応える動きをしています。

2010  
No.240  
7

# JIFH 日本国際飢餓対策機構 飢餓対策 News

## 夏のオリエンテーション トレーニング参加者募集

当機構を通して、海外パートナーと共に活動することを願う方々の、学びと準備の時です。国際協力の働きに関心をお持ちの方は、どうぞご参加ください。

[第 30 回]

- 日程：8月9日(月)～13日(金)
- 場所：グレース宣教会・紀勢会堂(三重)
- 定員：12名
- 費用：25,000円(申込金5,000円含む)とテキスト代5,000円
- 問い合わせ先：大阪事務所まで

## 「全国賛助会」が発足

このほど日本国際飢餓対策機構の活動を支援する組織として「全国賛助会」が発足し、初代会長に当機構前理事長の堀内顕氏が就任されました。同組織は、様々な形態で飢餓啓発を行いながら、当機構の活動を支援します。これから各都道府県単位で支部を順次拡大していく予定です。

## 本 de リンク!

～「古本」「CD」で国際協力!～  
古本や音楽CD、DVD、ゲームソフトを当機構・愛知事務所にお送りください。飢餓・貧困に苦しむ方々のために用いさせていただきます。  
★ご協力して下さる方は必ず事前に、愛知事務所までご連絡ください!  
TEL:052-731-8111  
E-mail aichi@jifh.org  
報告：5月集計/本73冊 CD75枚

★夏のワークキャンプ受付終了  
申込みありがとうございました。

## ハンガー・ゼロ・サポーター 1 万人大募集

### 今すぐ▶▶▶ 各種支援の お申し込み ができます!!

●まず右の必要事項に記入して、点線の枠部分を切り取りハガキに貼って、下記の大阪事務所宛に郵送、又はこの頁をコピーして、ファクシミリで申し込みください。確認のための必要書類を送らせていただきます。  
お電話でも申し込みできます。各事務所までおかけ下さい。

- ハンガー・ゼロ・サポーターとして協力します。  
毎月 ( ) 口、協力します。(1口 1,000円)
- JIFH 会員になり毎月定期的に財的協力をします。  
毎月 ( ) 口、協力します。(1口 500円)
- 「世界里親会」に協力します。  
説明書、里親会入会申込書を送ってください。
- 海外派遣スタッフを支援します。  
毎月 ( ) 円 ( ) スタッフ指定
- 海外派遣スタッフを支える会の会員になり、  
協力します。毎月 ( ) 口 (1口 1,000円)
- 郵便自動引落の申込書を送って下さい。

フリガナ  
氏名： \_\_\_\_\_ 男・女

〒 \_\_\_\_\_  
住所： \_\_\_\_\_

\_\_\_\_\_ (電話)

▼申込日： 年 月 日▼

FAX・072-920-2155

自転車  
で  
国際協力  
バイクソン

5月22日、愛知郡長久手町にて I CAN (International Christian Academy of Nagoya) が主催するチャリティーイベント「バイクソン」(bike-a-thon) が開催されました。バイクソンでは、参加した子どもたちが自分の自転車に乗り、走った距離だけ、協力スポンサーが募金するというユニークな取り組みです。



この協力によって集まった募金の全額 133,050円は、I CAN から当機構への募金に充てられました。貧困と飢餓に苦しんでおられる人々を応援する活動のために用いさせていただきます。ありがとうございました。(愛知・小島)

イベント当日、雲一つない快晴の中で参加した子どもたちはみんな楽しそうに自転車に乗って、気持ちの良い汗を流していました。

★ご協力を感謝します★皆様に飢餓対策ニュースをお届けするために、毎月、ひばり障害者作業所(八尾市)、生活愛(大阪市など)、そして関西一円のボランティアの皆様が発送作業のご協力をして下さっています。ありがとうございます!

■発行者	岩橋竜介	大阪	〒581-0032 八尾市弓削町 3-74-1 TEL (072)920-2225 FAX (072)920-2155
■発行所	一般財団法人 日本国際飢餓対策機構	東京	〒101-0062 千代田区神田駿河台 2-1 OCCビル 517号室 TEL (03)3518-0781 FAX (03)3518-0782
Web サイトアドレス	http://www.jifh.org/	愛知	〒466-0064 名古屋市昭和区鶴舞 3-8-10 愛知労働文化センター 2F TEL (052)731-8111 FAX (052)731-8114
eメールアドレス	general@jifh.org	広島	〒731-0103 広島市安佐南区緑井 2-21-23 201号 TEL (082)831-1214 FAX (082)877-3961
■郵便振替	00170-9-68590 / 日本国際飢餓対策機構	沖縄	〒901-0156 那覇市田原 3-8-1 ユリ香ハウス 201号 TEL (098)859-4585 FAX (098)859-4540
	※支援金は随時受け付けております。		



携帯サイト

世界人口が70億人という時代がそこまで来ています。しかし、同時に貧困と飢餓にあえぐ人々の数も増加し、10億人を超えました。日本の人口の約10倍の人々が、飢餓に苦しんでいるこの時代に私たちは生かされています。飽食と無駄の満ちたライフスタイルに甘んじている日本では、なかなかこの世界の現状を肌で感じることはできません。しかし、これが世界の現実なのです。

以前フィリピンの方が訪ねてこられた時に、捨ててある粗大ゴミを見て、ぜひ持って帰りたいと言いつつ出されて閉口しました。しかし私がフィリピンのパヤタスというゴミの山がそびえ立つ町に行った時、私にとってゴミであったものは、貧困の中で生活する人にとっては、宝物であることを知りました。

それでいて給食センターでの給食の際、子どもたちがその日一回しかない食事を食わないで自分の家族に分かち合っている姿を見て、「本当の豊かさ」とは何かと心底考えさせられました。

人は偶然存在しているわけではありません。崇高な目的をもって、創造主なる神様によって造られ、生かされているのです。誰一人として無駄な人はいません。「私の目には、あなたは高価で尊い。私はあなたを愛している」と、この神様は語ってくださいます。ゴミのように捨てられ、死んでいい人など一人もいません。神様はそのひとり子・イエス様を与えるほどに、この世の人々を一人ひとり愛して下さいました。十把一絡げでなく、一人ひとりです。あなたも私もその一人です。

## 飢餓が終わる時は必ず来る

10億人という数を聞くと途方もない数字に思いますが、しかし、それは一人ひとりの集まりです。ですから、私から始めて、一人ずつ愛して助けていくことができるのです。私たちに与えられている豊かな食料と、神様の愛を分かち合う時に、飢餓が終わる時が必ず来ます。肉体的飢餓と魂的飢餓。明日からではなく、今日から分かち合いを始めましょう。まず私から、そしてあなたからです。

一般財団法人 日本国際飢餓対策機構 理事長 岩橋竜介



# 新たな出発



## 世界の飢餓を終わらせるために 物心両面の飢餓対策への決意を新たに！

日本国際飢餓対策機構は、7月1日から一般財団法人日本国際飢餓対策機構として新たに出発しました。今まで支援者の皆さまから、法人格を取らないのか、寄付が税金の控除の対象にはならないのかというご要望やお問い合わせが多数ありました。長らく国会で議論されてきた公益法人に関する法律が改正され、2008年12月より施行されました。これによって、二つの飢餓に对应していく日本国際飢餓対策機構も法人格を取得することができるようになりました。寄付控除が受けられる公益法人の取得はまだ少し先になりますが、早く公益法人を取得できるように努力してまいります。

これまで本当に多くの皆さまの応援に支えられ、20年以上にわたり現金ベースでは93万件70億円を超えるご支援をいただきました。この間に日本国際飢餓対策機構を通して支援をさせていただいた国は30ヶ国以上、益を受けた人々は数百万人に上ります。これもひとえに皆様のご支援の故であると心から感謝を申し上げます。

### 飢餓人口10億人突破

この20年、世界の情勢は大きく変わってきました。数年前まで途上国

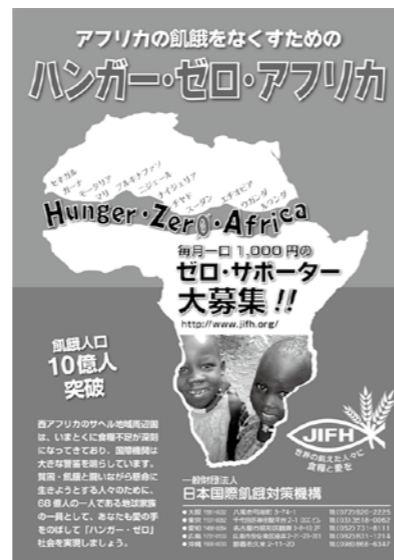
と呼ばれていた国が工業先進国の仲間入りを果たしという例がいくつもあります。しかし、その一方で飢餓人口は10億人を越えたというショッキングな報告が昨年WFP国連世界食糧計画からありました。1日25,000人うち14,000人が5歳以下の子どもたち、それらの尊い命が飢餓やそれに関連する病で命を落としています。私たちは与えられた使命、「世界の飢餓を終わらせること」を果たすために継続した活動を行っていかねばならないと、改めて強く思っています。神様はご自分がお造りになったこの世界で、飢えて死んでいく人々、それも数多くが神様が愛してやまない子どもであることを良しとはされません。組織の形態は変わっても、今以上に日本国際飢餓対策機構の名前の通り、物心両面の飢餓対策を行っていかねばならないと感じています。

### ハンガー・ゼロ・アフリカ

日本国際飢餓対策機構は、しばらくハンガーゼロ・アフリカを皆さまにアピールしていきます。特に、アフリカのサハラ以南の地域では、早魃によって人口の半分が飢餓状態に陥っている国々があります。飢餓を終わらせるためにもっとアフリカに目を向けなくてはならないことを痛

感させられています。今後、アフリカで現在継続的に支援させていただいているエチオピア、ウガンダ、ルワンダのみならずスーダン、ニジェール、ガーナといった国にもさらに力を入れて、子どもたちが食べていくことができるコミュニティの実現にあたっていきます。そのためにも今後も皆様のご支援と応援が必要不可欠です。これからも日本国際飢餓対策機構の活動をご支援ください。どうぞよろしく願いいたします。

日本国際飢餓対策機構  
常務理事 清家弘久



「ハンガー・ゼロ・アフリカ」のアップルのためにチラシや専用ウェブサイト（twitter対応）も計画しています。ぜひ、みなさんもハンガー・ゼロの発信者となってください。

## …忘れ得ぬ瞳…

※ その1 ※

私が1996年から1997年まで働いた、アンゴラ人民共和国で出会った人をご紹介します。

アフリカ大陸の南西部に位置するアンゴラは、1975年ポルトガルから独立しましたが、独立紛争以来20年以上に渡って内戦の続いた国です。油田やダイヤモンドなど資源が豊富で、世界に於けるコーヒー豆の主要な産出国の一つでもありました。私が働いたアンゴラの北部には、紛争によって疲弊していたものの、かつては穀倉地帯であった広大な湿地帯、美しい町並みやコーヒー工場などが破壊されてわずかにその痕跡を留めていました。世界でも対人地雷の数が多く、一節では当時の人口より埋められた地雷の数の方が多いと言われていました。

私は、首都から飛行機で1時間余り、それから更に車で3時間余り行った小さな村に居住して、その村から数十キロ離れた村で、小さな診療所の運営を手伝っていました。

当時、ボランティアとして働いていたスイス人の若い医学生が、「朝が怖い・・・」と言っていました。それは、始業するや否や難題が持ち込まれ対処に苦慮するからでした。慣れない国で、しかも限られた資源の中で決断してゆくことは、否が応でも自身の限界と直面することになるからでした。

### 「手を尽くす」こと

ある日、生後1ヶ月の赤ちゃんがお母さんとお祖母さんに伴われて診療所へやって来ました。主な症状は、お腹が大きく腫れて硬く、3日余り排便がない、という事

でした。ここ何日間は、母乳も飲んでいませんでした。おそらくお腹の中の出血か、または何らかの原因によって腸閉塞を発症しているだろう、と思いました。日本であれば緊急手術の対象です。

この赤ちゃんを病院へ連れて行かなければなりません。しかし最寄の病院には、手術の設備は無く殆ど医師が不在で、緊急手術などは論外でした。更に、病院は私たちの診療所

へ移送することに決めました。

救急車や公共の交通機関はなく、現地の人の移動は徒歩でした。同僚と相談した結果、一日の仕事を終えた後、赤ちゃんと家族は私たちと一緒に私たちが居住する村へ行き、そこで一泊し翌朝私たちの車で病院へ向かうことになりました。

### 生後1ヶ月の命の訴え

帰宅するまで、私はこの赤ちゃんの側に居てお腹のマッサージを行いました。既にこの赤ちゃんは衰弱していたのでしょ。泣き声を上げることはありませんでした。私がマッサージの手を休めると、赤ちゃんは青く澄んだ美しい目を大きく開いて、マッサージを続けるよう訴えるのでした。そして、再開すると目を閉じてすやすやと眠るのでした。育児の経験の無い私にとって、僅か生後1ヶ月の赤ちゃんがこれほどに雄弁だったのは驚きました。

翌朝、お祖母さんが赤ちゃんの計報を告げてきました。身体を中心から力が抜けてゆくような虚脱感を味わいつつ、無言のままお祖母さんと別れました。

ある統計では、生後1歳以下の乳児死亡率がアンゴラでは1,000人中154人、日本では3人。第三世界で今日一日、愛する子を亡くして流す母の涙はどれ程あるのでしょうか。



竹内 緑  
1993年以来、ソマリア、旧ザイール、アンゴラ、エチオピアで緊急支援に従事。2006年9月からルワンダのカモニ郡でトラウマ被害者支援に取り組む。



# 「真の自立支援とは」

JIFH海外プロジェクト アドバイザー  
元国際飢餓対策機構 総裁 ランディ・ホーグ



元国際飢餓対策機構総裁として、多年にわたり緊急支援や自立支援の活動にリーダーの立場でかかわってこられた当機構海外プロジェクトアドバイザーのランディ・ホーグ氏に「真の自立支援」をテーマに特別寄稿をしていただきました。ランディ氏の飢餓問題に対する深い見識、人の内面にまで深く掘り下げた視点からの開発援助に求められる原則は、当機構がこれまで続けてきた働きを再確認し、さらに強い思いで世界の人々にチャレンジしていく上で大きな励ましとなりました。

## 【 静かな飢餓 】

今日の世界では、緊急事態が発生すれば、ニュースとしてすぐに報道され、誰もがそれを知ることができます。例えばハイチ地震はメディアによって広く知らされました。そして私たちが援助の手を差し伸べるのは大切なことです。

一方、世界にはメディアの入らない国があります。そして驚くようなニュースは何ひとつ伝えられません。ただ静かです。深刻な飢餓は静かなのです。人々はくる日もくる日も食べるものがなく飢えています。飢餓はセンセーショナルなニュースではないので、誰にも知らされません。



この、他の誰かが気がかけない、隠された多くの悲劇、隠された飢餓に手をさしのべることを、私たちは求められています。それは確かに起こっているのです、しかし驚くようなニュースではないので、だれも彼らを助けようとしません。ですか

ら、私たちが目を注ぎつづける必要があります。

例えば西アフリカ。そこには世界のもっとも貧しい国々があります。誰も知らない、その国について聞いたことのないような国々です。これらの国々は、赤道の北、北緯10度から40度の間の地域にあります。

## 【 支援の三つの核 】

飢餓・貧困に苦しむ方々には、全人的にかかわることが大切です。肉体的面でも、霊的な面でも、感情の面でも、社会的にも、全ての面においての支援という意味です。

しかし、大切なのはそれだけではありません。共同体が成長し始め、自立することが必要です。そのためには3つの核となるものがあります。

それは、地域の教会とリーダーと家族です。これを「共同体のビジョン」(Vision of Community)と私たちは呼んでいます。多くの開発援助団体は、地域のリーダーと家族に焦点を当てます。しかし国際飢餓対策機構はこれらの3つ全てに焦点をあてています。教会とリーダーと家族、その一つ一つが本来意図されたように働くとき、共同体はおのずから成長すると考えます。

## 【 パートナー 】

私たちは、このような国々に事務所を作って活動していくのではあり

ません。現地にすでにあるパートナーを探します、そのほうがずっと効率のよい働き方ができるからです。車や事務所の管理に多くのお金を費やすより、現地にすでにある同じ志を持つパートナーを探して、共に活動するほうが、より多くのお金を貧しい人々のために使うことができます。



## 【 リーダー 】

共同体(コミュニティ)が自分自身で成長するのを助けるために、最初にとっても重要なことは、地域のリーダーを育てることです。まず地域で話し合いを持ち、人々が自分たちで何かを始めることが明らかになった場合、そのプロジェクトを支援します。

聖書にあります、イエス・キ

リストが5千人のおなかをすかした人々に食べものを与える前、最初にお尋ねになったのは「あなたは何をもっていますか?」でした。彼らは5つのパンと2匹の魚があると答えました。私たちも、開発に



おいて、最初に人々に「あなたは何をもっていますか?」という質問から始めます。その持てる能力でできることを始めることから、共に働くチャンスが与えられます。

一般にはその反対の方法、すなわち多くの寄付金で何かをはじめ、その後地域のリーダーを育てようとします。一番良いのはまず地域のリーダーが育てられ、そしてプロジェクトがそれに続くことです。

## 【 共に成長する 】

このような支援を行うためには、まず現地の人々と良い関係を築かな

ければなりません。最初の1年くらいは、大きなプロジェクトは始めないで、良いモデルとなって人々の世話をし、人々を知るために時間を使います。そうするうちに人々から信頼されるようになり、話に耳を傾けてもらえるように自然になります。まず人々に仕えることができるよう、自分自身が変わることです。

## 【 すべてを解決できるか 】

全ての問題を解決する、という考えを変えなければなりません。私たちは現地の人々が、自分たち自身で成長していけるようなアイデアをそこに植えるのです。「共同体のビジョン」はその共同体が自分で成長していくよう助けるためのものです。私たち外国の団体が、そこにある問題を全部解決するものではありません。だから同じところにいつまでもとどまらないのです。

また、私たちは一つのプロジェクトに永久にかかわり続けることはしません。同じプロジェクトに何年も資金をつぎ込むと、コミュニティ

がそれに頼ってしまうことになりません。依存を生むことは開発を助けることにはなりません。一箇所をある程度の期間支援しますが、いつまでもそこに居続けることはしません。移動して、成長するコミュニティの数をどんどん増やす必要があります。



JIFHはプロジェクトのための募金を受けるだけではなく、働き人を日本から送っています。単なる協力団体というのではなく、人を大切にしている組織であるということです。全人的な協力のために、「共同体のビジョン」のために人を送っている団体です。

JIFHの3つの大きな特徴、それは全人的なケア、共同体のビジョン、そして人の派遣です。



JIFH研修会：5月13・14日に大阪市内の研修施設において、当機構全スタッフを集めての研修会が行われました。当日は、ランディ氏を特別講師に迎え、新法人の岩橋理事長、評議員も数名加わり当機構が世界の人々に対して担っている使命、今後の展望などを活発に討議、それぞれが決意を新たにするとともに、



# 世界里親会 活動地のこども



カンボジア・サラ・チューク：ネール君

報告者：ウム・ポー

国際飢餓対策機構カンボジアの現地スタッフからの報告

カンボジアからこんにちは！  
こちらはとても暑く、夜もしばらく外に出て涼んでから床に寝ています。サラ・チューク村のネール・ラベス君について報告します。

## 生活の様子

このサラ・チューク村には165世帯、760人が暮らしています。

9割が農業で生計を立てていますが、自分の田畑を持たない家族も多く、その場合はお金持ちから土地を借ります。また田畑を持っていても1年を通して十分な収穫を得ることができません。

ほとんどの家庭では基本的な健康管理の仕方を知らず、病気の予防の方法や原因がわからないまま病気の治療に多くのお金を使っています。

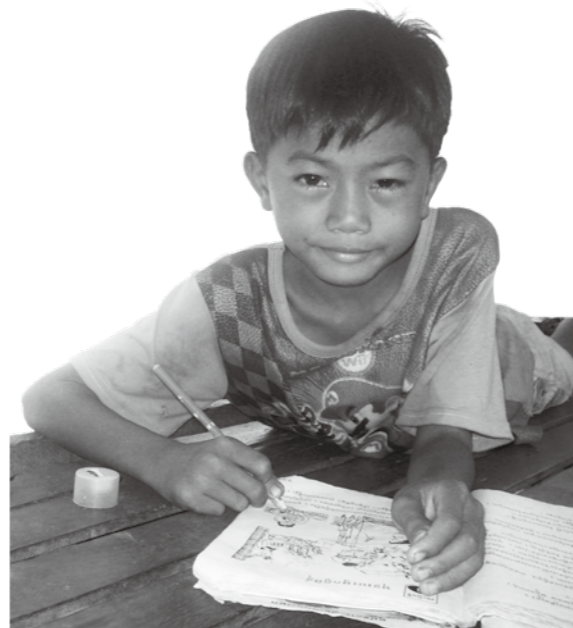
子どもたちは家族を助けるために田んぼで働いたり、牛の世話、子

守、薪拾いをしたりしなければならず、学校を何度も休むので先生に会いたがらなくなる子どももいます。

ネール君は7歳で両親とこの村に住んでいます。以前は学校にはあまり行かず他の子どもと村をうろついていた。両親はそれを気にかけることはなく、毎日の食べ物のことばかり心配していました。子どもが良い教育を受けても、裕福な親戚がないからでした。(カンボジアでは、社会的に高い地位や権力をもつ親戚がいなければ、良い仕事は得られません)。

## 状況の変化

FHカンボジアのスタッフが、この家族を訪問した際、ネール君の問題の根本的な原因を知りました。両親が彼の勉強について関心を持っていなかったのです。FHのスタッフは、ネール君に、教育を受けた人の例をあげて、公務員の仕事につけなくても、知識は一生役に立つこと、また政府の仕事をしなくても経済的に豊かになっている人がいることを伝えました。そして両親にも彼の勉



強を助けるよう励ましました。

スタッフが話したことをはっきりと理解するにつれ、今ではネール君は一生懸命勉強するようになりました。そして高校を卒業して村で教師になりたいといっています。

ネール君のお父さんは

「例え私がどんな困難に会おうとも息子を精一杯支えようと思っています。この子にやる物は何もないけれど、勉強ができるよう助けたいのです。良い教育を受ければ、彼がだまされるようなことはなくなるでしょうから」と言います。

今、ネール君は夢の実現に一步踏み出しています。自習の時間を決めました。宿題もきちんとやります。両親の農業の手伝いもするようになりました。どんなことでもスタッフに尋ねてきます。

彼がしっかりと勉強しようという強い意志を持ち、両親が全力でそれを助けようとするのでネール君は家族と良い関係を築くことができ、将来コミュニティーのリーダーとなることのできるのです。



国際飢餓対策機構カンボジアのスタッフと共に写真の一番右が吉田スタッフ



私は、2010年6月末で国際飢餓対策機構カンボジア(以下FHカンボジア)での仕事を終え、7月初めに帰国いたします。2004年1月の派遣から6年半の間ご支援くださり、ありがとうございました。(支援金の受付は2010年3月末で終了いたしました。)帰国後3ヶ月間、ご支援くださった方々を出来る限り訪問し、活動報告をさせていただきます。

## ■やるべきことを終えたから帰るのです■

私の帰国が決まると、何人かのカンボジア人が言いました。

「もう戻ってこないの？私達を捨てて帰るんだ〜。」  
(いや…捨てるわけじゃないけど、まあそうとも言うか?)  
そうかと思えば、今度は嬉しそうにコソコソと「マキ！帰る時、あなたのバイクはどうするの？売るのは？食器類は？」  
(ちょっとそんなに私が帰るのを待ちに待っているわけ?)

言われる私は、戸惑いましたが、もし私が彼らの側であったら、同じことを言いたくなっていたらと思うと思います。帰国時期が正式に決まってから、色々な出来

事や人との関わりの中で、本当に帰国していいのかと、ふと思うことがありました。

しかし、自問自答している中でいつも確認させられることは、私が多くの方々からの支援金によってFHカンボジアに派遣されているという環境と仕事の目的です。

目的は、人づくりでした。誰に対して何を伝えるのか、それは、私の場合は、FHカンボジアで働いている現地人スタッフに対して、団体の目標に沿った活動ができるよう教育することでした。この環境の中で、この目的のためにすべきことは全てさせていただいたので、帰国するのです。とても単純なことなのです。しか

し、振り返ると、周囲の出来事や人の情によって、見るべきものが見えなくなり、判断が鈍りやすい環境にあったと思います。帰国まで後1ヶ月足らずとなった今、帰国に関して疑問に思うことはもはやなくなりました。帰国後の支援者の方々との再会を楽しみにしております。



6年半の間、吉田真記スタッフを応援してくださった皆様に感謝を申し上げます。(JIFH)